

## カナダのアフガニスタン移民・「難民」の現実 —カナダにおける聞き取り調査結果から

嶋 田 晴 行

はじめに

過去 40 年間、外部の介入と内部の混乱から多くのアフガニスタンの人々が国境を超えてきた。本稿は、その中でカナダを移住先としたアフガニスタンの人々への聞き取り調査の概要とその暫定的な分析結果である。暫定的との意味は、後述のようにコロナ禍により当初の調査計画の大幅な変更を余儀なくされたことによる。

カナダを目指すアフガニスタン人は、地球の反対側に位置するというその地理的距離もあり多くはない。しかし、政府自らが多文化主義を掲げ、海外から移動する多くの人々からも目指される国であるカナダは、アフガニスタンの人々にとっても選ばれる土地である。

今回調査の対象者となったのは、アフガニスタンにおいて社会階層は低くなく、経済的にも比較的恵まれた人々である。それゆえに、この調査結果を一般化することはできない。そのような制約を認識しつつも、今回さまざまな課題が浮かび上がってきた。簡単に言えば、移住後に彼らが直面した現実は決して思い描いていたものではなかったのである。

アフガニスタンから国外への人の流れは、2021 年 8 月のタリバーンの事実上の政権復帰によって加速した。ただ、それは今回の調査後に起こったことゆえ、本稿で直接に触れることはできていない。しかし、たとえ結果が暫定的であるとしても、以下の内容がアフガニスタンを逃れた人々の今後を考えるための参考となり、今後の対応への示唆を与えてくれるものでもあると考える。

### 第 1 章 移住先としてのカナダとアフガニスタンとの関係

#### (1) 多文化主義への道

アフガニスタン人に限らず、カナダは移民や「難民」と呼ばれる人々にとって移住先として

目指される国とされてきた。以下のように、カナダ政府自身がそのことを公式に語っている<sup>1)</sup>。

「カナダは、先住民とヨーロッパのフランスと英国から来た人々との邂逅から誕生しました。より良い生活を求めて世界各地からやって来る移民の波が打ち寄せるにつれて、カナダは成長を続けています。過去 40 年間、カナダの民族と文化はますます多様性を深めてきています。1971 年、カナダは世界で最初に多文化主義政策を採用しました。カナダは民族や人種の豊かな多様性を認め、尊重しています。カナダには、200 以上の民族が共に生活し、40 カ国語以上の新聞や雑誌が発行されています。現在、カナダの人口増加の半分以上が移民によるものです。カナダ多文化主義法は、異なる出身の個人や集団間の交流を図るだけでなく、出身の相違にかかわらずすべての人がカナダ社会へ全面的に、また平等に参加するよう推進しています。多文化主義を通してカナダは、すべてのカナダ人の潜在能力を認め、社会へ参加し、社会、文化、経済、政治において積極的な役割を果たすよう促しています<sup>2)</sup>。

しかし、「カナダへの移民の歴史は、決して公平、平等、尊重の物語ではない」とあるように<sup>3)</sup>、その多文化主義を外部に向かって打ち出せるようになるまでには、長い時間が必要であったことも周知の事実である。

以下、ノールズ (2014)、加藤 (2018) を参考に簡単にその歴史を振り返っておく。

フランスあるいは英国からの移民によって造られたカナダは、第二次世界大戦終了の頃まではいわゆる「白人優遇」政策のもと、主としてヨーロッパからの移民を受け入れることを念頭に置いて制限的な移民政策をとっていた。カナダが戦後、移民の受け入れの門戸を広げた理由は、人種差別的な政策の見直しという点に加え、そもそも人口が少ないカナダにおいて経済・社会を維持、成長させるための労働力の確保という目標があり、そのためにカナダにとって望ましい労働者を受け入れるという方針がその基礎にあった<sup>4)</sup>。

そのような背景から、1962 年には人種、宗教、国籍などで差別してきた移民政策を廃止し、1967 年に熟練労働者の受け入れを目的として世界初めての学歴、職歴、言語能力 (英語、フランス語)、年齢、就業可能性などを得点化するポイント・システムが導入された。その結果、1966 年には移民の 87% がヨーロッパ系だったが、4 年後には 50% が西インド諸島、ガイアナ、ハイチ、香港、インド、フィリピン、インドシナからとなり、1970 年代と 1980 年代を通して、移民のほとんどがアフリカ、アジア、カリブ海諸島、ラテンアメリカ出身者になった。

その後、1971 年にはカナダ政府のホームページにあるように、当時のトルドー首相は英語とフランス語の 2 言語主義の枠内で多文化主義の政策を採用するとし、1988 年には、人種、出身国、肌の色、宗教の違いによらずカナダ社会のあらゆる側面に完全に参加できることを政府へ求める「多文化主義法」(Canadian Multiculturalism Act) が制定された。そのような方向性はその後も維持され、2002 年以來、毎年 6 月 27 日を「カナダ多文化主義の日」としているほか、2015 年には「カナダの多様性はカナダの力」をスローガンに掲げたトルドー首相の

カナダ自由党が勝利した<sup>5)</sup>。

その一方で、移民・「難民」の受け入れには慎重とも言える対応を取り続けたことも確かである。例えば、難民の地位と権利を定めた「難民の地位に関する条約」あるいは「ジュネーブ条約」に関して、カナダ政府は1951年のその策定会議へ参加しただけではなく、起草委員会委員長はカナダ人であったが、政府は1969年まで条約に署名しなかった。その理由は、1967年の「難民の地位に関する議定書」と併せて、治安上の懸念から「難民」を国外退去させることへの制限が課されることを嫌ったからだとされる<sup>6)</sup>。

その後もカナダは移民、「難民」の受け入れを進めたが、その基本は、人口が少ないことで不足する労働力を埋めるといった観点から、カナダ経済に寄与する移民（労働者）の選択的な受け入れであった。それは「特定技能制度」や「技能実習制度」などによって、自国にとって「良い」外国人に限っては受け入れる方針を打ち出してきた日本政府の方針とも通ずるものがある。

## (2) カナダのアフガニスタンへの関与

カナダとアフガニスタンの関係は、歴史的にも政治・経済的にも深いものでは無かった。しかし、2001年9月の米国での同時多発テロ以降、両国の関係は一変した。2001年以降のアフガニスタン国家再建の中で、カナダは治安維持のため国軍の派遣を行った結果150名以上の犠牲者を出し<sup>7)</sup>、あるいは米国、英国、ドイツ、日本と並んで復興・開発援助をおこなう中心的な国の一つとなった。

なぜカナダ政府はそこまでアフガニスタンへ関わろうとしたのか？その問いに簡単に答えるのであれば、超大国ではないが国際社会の中でユニークな存在感をアピールする「ミドル・パワー」としての国際社会の中での位置、つまり国連PKOといった平和維持活動あるいは平和構築支援へ積極的に関与することで、国際社会の中での特異な地位を築いて来たカナダ外交の歴史があった。それに加え、2003年のイラク侵攻時にイラクへの派兵を行わなかった代替措置として、米国などとの同盟を維持するためのアフガニスタンへの派兵・支援という側面もあった<sup>8)</sup>。

そのようなカナダ政府の政治・外交的な意図は、地方部の治安維持と復興を担う駐留外国軍と援助機関などとの軍民協働部隊である地方復興チーム（Provincial Reconstruction Team, PRT）を反政府勢力の拠点、つまり高い危険が伴う任務地である南部カンダハールへ派兵したことにも現れている<sup>9)</sup>。しかしそれは、タリバーンの復権後にカナダへ協力したアフガニスタン人への直接、間接的な脅威にもつながった。

なお、本稿では詳述しないが、カナダの歴代政権にとってアフガニスタンとの関わりは、政治的に微妙かつ繊細な事項でもあった。それは、「アフガニスタン」を国内政治の論点にしな

いために、派兵する意義について歴代政権は明確な説明をせず「戦争」(war) ということばを使うことを避け、「安定化」(stabilization)、「再建」(reconstruction)、「平和構築」(peace building) といった言葉を使用してきたことにも表れている<sup>10)</sup>。

## 第2章 カナダを目指したアフガニスタン人

### (1) 国境を超えるアフガニスタン人

UNHCRによれば、2021年央でアフガニスタンから出国した難民・庇護希求者は約260万人とシリア、ベネズエラに次いで3番目に多い<sup>11)</sup>。それらのアフガニスタン人にとって、隣国であるパキスタン、イランは従来から最大の受け入れ国となっている<sup>12)</sup>。

アフガニスタンの人々の国外への移動(退避)は、過去40年間にわたる混乱の中で恒常的に続いてきたものである。1978年のサウル革命(社会主義革命)、1979年のソ連による軍事侵攻、1990年代前半の国内の各派による内戦、1990年台半ばからのタリバーン政権期と、そのときどきの経済・社会体制に不安や不満を感じる、あるいは生命の危険を感じる人々は、多くは隣国のパキスタンやイランへ避難、移住した。

その他にも留学や職を求めて多くの人びとがEU諸国、特にドイツや北欧諸国を目指してきたが、それらは経済的にも教育機会にも比較的恵まれた人々でもあった。しかし、2015年のいわゆる「難民危機」に際には、決して豊かではない多くのアフガニスタン人が陸路、ヨーロッパへ目指した。そして2021年8月のタリバーンが政権へ返り咲いたことで、多くのアフガニスタン人が海外を目指すことになった<sup>13)</sup>。

### (2) 現地調査の概要と結果

#### a. 調査の概要と制約

本調査は2019年から2020年にかけて実施した、カナダの東部と西部に住むアフガニスタンからの移民15名への聞き取りによる調査である。第一次調査としてカナダ在住のアフガニスタン人移民1名を調査員として雇用し、事前に著者が準備した質問を基に年齢、出身地、学歴、職歴、カナダを目指した理由、カナダでの生活の様子など基本的な情報の聞き取りを行った。当初計画では、第二次調査としてその中から数名を選び、著者自身が現地で再度、詳細な聞き取りを行う予定であった。しかし、2020年初頭からのコロナ禍によりカナダにおいても外出制限が課されるなど、渡航が困難となった。そのような事情から、2020年においても引き続き同じ現地調査員によって、電話あるいは状況が許せば対面での追加の聞き取り調査を実施した。

ところで今回の調査員はアフガニスタンにおいて外国の援助プロジェクトに従事した後、奨

学金を得て米国へ留学しその後カナダへ移住したという高い学歴と豊富な職歴を有する男性である<sup>14)</sup>。反面、このような調査員の経歴が、聞き取り対象者の選択へ影響を与えていることは否めない。具体的には、以下の調査結果概要でも示したように、今回の回答者はいずれも学士号以上の学位を有し、アフガニスタンにおいて中央・地方の政府関係機関、国際機関、国際NGOなどで勤務した経験を有する。つまりはアフガニスタン社会の中では階層的に上位層に属する人びとである。これは調査員の周辺にいる知人、あるいはその知人の伝手を頼って回答者を探したことで、調査員と同じような属性、境遇にある人たちが対象者となったことによる<sup>15)</sup>。

偏りがあることを認識した上でも、そのようなサンプル抽出は以下の理由から大きな問題は無かったと考える。それは今回の調査において聞き取る内容が、アフガニスタンからの出国とその後の生活に関わる、回答者それぞれの私的かつ繊細な情報であるため、短期間で回答を得るには調査員と何らかの面識あるいは信頼関係がある人々を対象とせざるをえなかった点である。また回答者たちはその経歴からも英語での意思疎通が可能であるが、彼らがアフガニスタンで使用していた言語（主にダリー語）で聞き取りを実施することが、より「答えやすさ」へつながったと考える。

以上のようにコロナ禍、アフガニスタンの置かれた状況から制約を受けつつ、本調査は実施された。なお、これまでアフガニスタンから隣国であるパキスタンやイラン、あるいはドイツなどのヨーロッパ諸国へ移動、移住した人々への調査・研究は見られるが<sup>16)</sup>、カナダなどの北米へ移り住んだアフガニスタン人については、その数が比較的少ないこともありあまり行われてこなかった点も付け加えておく。

## b. 聞き取り結果の概要<sup>17)</sup>

2019年実施 7名

①年齢：40代後半、出身地：アフガニスタン東部、学歴：学士号（医療関係）、滞在資格：永住権、滞在期間：4年

パキスタンで人生の半分を過ごした後、友人がスポンサーとなってカナダへ入国した。職探しには苦勞した。最初は倉庫勤務、次に公園の駐車場監視員であるが望んだ仕事ではない。とにかくゼロからのスタートであった。移住の理由は治安の悪化であるが、アフガニスタンのみならずパキスタンでも「難民」であることから警官などから嫌がらせを受け、治安への不安もありカナダへの移住を希望したが、受け入れ許可まで数年を要した。カナダは住みやすいと想像していたが、10名を超える大家族の自分にとって家を探すのは大変な苦勞である。契約段階で大家に大家族であることを理由に拒否されたこともある。学校や保健所などへの同行など、英語をまだ話せないあるいは運転できない家族の面倒も大変である。また生活費なども高

い。治療の質の高さは認めるが、娘の歯の治療に5千カナダドルかかった<sup>18)</sup>。大家族の家計を支えるのは自分だけであり (only breadwinner) 大変な苦労がある。もしアフガニスタンが平和なら移住することはなかった。しかし他の選択肢はない。とにかくカナダは安全に住めることが一番であり、さまざまな国から来た人々がいるので多様性がある。何よりも子供たちに明るい未来がくることを願っている。

②年齢：30代前半、出身地：カブール、学歴：学士号と修士号、滞在資格：永住権、滞在期間：3年

従兄弟と妻が最初にカナダへ移住し、その後に自分も移り住んだ。移住の理由は治安の良さと経済的機会を求めたことである。当初はクチコミ、SNS、テレビ、美しいバンクーバーの山々の写真などからカナダへの印象は非常に良かった。しかしカナダで多くのホームレスを見た後に現実に気づいた。そこは必ずしも夢の国 (dream world) ではなかった。カナダ東部へ住むことを決めたのは、西部と比べて比較的物価が安いと考えたからである。これまでの経験上、他国 (例、エジプト、ドバイ、トルコ、インド、パキスタン) の入国審査ではアフガニスタンのパスポートを見せると疑うように出身地や職業を聞かれたが、カナダの入国審査ではそれがまったく無く、歓迎されていると感じた。カナダではほとんどの人は多様なエスニシティーや文化へ寛容 (open) であると感じている。ただ、アフガニスタンに残した家族がいつも気がかりである。

③年齢：不詳、学歴：修士号、滞在期間：6年

生活の中で困っていることは、高速道路への入り方など運転する際の規則に慣れないことである。博士号取得を目指して移住したが、最初の1年間は生活のために働くだけであった。100程度の職に応募したが、ありつけたのは皿洗いであった。修士号をもつ自分にとっては気持ち的に耐え難い職であった。数ヶ月後にビルメンテナンスのマネージャー職を得たが、それも辞して現在は博士号取得を目指している。将来、欧米の有名大学で博士号を取得しアフガニスタンの教育分野へ貢献したい。妻は英語があまり話せないが、居住地 (カナダ東部) 郊外にはアフガン人移住者のコミュニティがあり、礼拝や社会活動への参加など様々なサポートが受けられており感謝している。

④年齢：30代前半、出身地：アフガニスタン東部、学歴：学士号 (生物学)、滞在資格：protected persons 申請中<sup>19)</sup>

アフガニスタンではNGO、政府機関で勤務したが、故郷に戻った際に脅迫を受け移住を決意した。米国へ渡った後にカナダへ移動し現在永住権を申請中 (protected person) である。

カナダには多くの職があることは事実であるが、求める職に就くには時間と忍耐が必要である。現在、倉庫管理の仕事をしているが、家族を養いアフガニスタンへ送金し、さらに貯蓄するだけの十分な稼ぎはない。勉強を続けたいが現状では難しい。カナダはヨーロッパに比べ移民へ優しい国との印象があったが、その期待に間違いはないと思っている。人々は移民や「難民」へ敬意をもって接してくれている。ただ、もしアフガニスタンに平和が訪れれば、帰国し国と人々へ貢献したいのが本音である。改めて、カナダでの職探しは非常に厳しいが、安心して家族と住めることがうれしい。

⑤年齢：30代前半、出身地：アフガニスタン東部、学歴：学士号（IT関連）、滞在資格：永住権、滞在期間：4年

現在、カナダ市民権申請中である。アフガニスタンでは州政府、NGO、国際機関で勤務したが、カブールにある欧米系の教育機関で勤務したことで様々な反政府組織から「辞めろ」と脅迫を受け移住を決意した。当初の期待通りではないがカナダは良い場所だと思う。ヨーロッパの国々と比較しても早く仕事へ就け、どこでも住みたいところへ住める。ヨーロッパへ向かっていけば、自分は難民キャンプの中での生活であっただろう。ただし、職に関しては過去の経歴は役に立たない。カナダでの職歴・学歴が必要である。最初は倉庫管理の仕事に就いたが、それは生きるための手段であり、別名「生き残るための仕事」(survival job)とも呼ばれている。家族は英語が話せないので、その世話に多くの時間がとられる。日々の糧を稼ぐために残業を繰り返す毎日である。アフガニスタンの情勢が良くなればすぐに帰国したいと思いつつ、カナダでの家族との生活に慣れてしまったことも確かである。

⑥年齢：20代前半、出身地：アフガニスタン東部、学歴：学士号（人的資源開発）、滞在期間：5ヶ月

生まれた直後からパキスタンで育ったが、2016年にパキスタン政府がアフガニスタン難民の帰還を命じたため家族とともにカブールへ移った。米国からカナダへ「難民」として入国しprotected personとして認められる見込みである。現在倉庫管理の仕事をしているが、望んだ仕事ではない。希望に沿う仕事を見つけるには長い時間が必要である。移住の理由は、留学先でモデルをしていて、その写真（女の子と一緒に）をSNSへ上げたことへ自分の一族（tribe）が激怒したことにある。それは殺害予告にまで至ったため、家族のアドバイスでアフガニスタンへは戻らないことにした。まだ5ヶ月の滞在であるが、予想通りカナダでは仕事も勉強に対しても機会が開かれており住みやすい自由の国であると感じており、自分の判断は正しかったと思っている。

⑦年齢：30代前半、出身地：パキスタン、学歴：学士号（コンピュータサイエンス）、滞在資格：protected person、滞在期間：4年

両親がパキスタンへ避難したためそこで生まれ長く滞在した。アフガニスタンでは国際機関が支援するプロジェクトで働いていたが、タリバーンからの脅迫に会い米国経由でカナダへ来た。現在、倉庫管理の仕事で監督を務めている。当初はカナダでの明るい希望を抱いていたが、現実には永住権が市民権そしてカナダでの勤務経験なしに希望の職に就くことは極めて困難である。永住権の申請をして4年になるが、入管からは何の連絡もない。何度も問い合わせているが、「処理中」との回答ばかりで納得できない。アフガニスタンにいる人びとは、私が月1万カナダドルを稼いでいると思っているらしいが、実際は2～3千ドルである。その半分を家賃と日々の生活費に充て、残りはアフガニスタンへ送金している。ただ安全であることだけがカナダにいる理由である。仮にアフガニスタンの状況が良ければ、良い仕事に就き安定した生活を送っていただろう。

2020年9月～12月 8名

①年齢：40代前半、出身地：アフガニスタン東部、学歴：修士号（獣医学）、現在の滞在ステータス：protected person、滞在期間：2年3ヶ月

アフガニスタンでは政府、NGOなどで16年間の勤務経験がある。移住の理由は治安情勢である。移住先としては米国、フランスも選択肢にあったが以下の理由でカナダを選んだ。さまざまな背景をもつ人々を受け入れる社会の多様性、人々の協調性、困った人たち（ホームレス、「難民」）を受け入れる素地、仕事と教育の機会、安価な医療、公平な法の執行、NGOの支援が受けられる、などである。ただ職探しに関しては、自分の学歴も経歴もまったく役に立っていない。家族と自分自身を養うために常に働く必要があるが、現在の職は自分の経歴と学歴にそぐわないものである。また家族の呼び寄せの書類審査は、あまりに時間がかかっている。それらの原因で、いつもホームシック、ストレス、鬱、その他の健康上の問題を経験している。もしアフガニスタンの治安に問題が無ければ、決して移住はしなかったであろう。

②年齢：不詳、出身地：アフガニスタン東部、学歴：学士号、修士号（農業関係）、現在の滞在資格：永住権、滞在期間：2年

海外への留学経験もあり、アフガニスタン国内では国際機関、NGO、政府機関に勤めた。一般的な話として、アフガニスタン国内の混乱と治安の悪化、特に政府とタリバーンなど反政府勢力との交渉がうまく進まないことで、特に高学歴の人材の国外への頭脳流出が続いている。自分自身は、欧米の支援を受けたNGOで勤務したことで、まず家族そして本人へも脅迫がくり返され、その職を辞した。その後、欧米ドナーの窓口となる政府機関の職員となった

が、引き続き脅迫が続いたため奨学金を得て海外留学した。数年後帰国し欧米との取り引きがある民間会社へ職を得たが、外国軍とも頻繁にやりとりすることもあったためか、再びタリバンから「政府や欧米と関係する団体から離れなければ殺害する」との脅迫が届いたため、カナダへの移住を決断した。カナダへ来る前のこの国への印象は、まず「平和」な国である。その印象は今も変わらない。ただ、雇用機会が広く開かれているとの期待は、その通りではなかった。いくつもの会社へ申し込んだが、雇用主から「カナダでの職業経験が必要」と何度も言われ、アシスタントレベル以上の職に就くことが困難である。結局、過去1年半は倉庫整理の業務をしている。一定以上の技術や能力のある人材にとって、「カナダでの経験が必要」との理屈は理解し難い。カナダが本当に知識と経験のある移民を惹きつけたいのなら、このような考え方を改めるべきである。

③年齢：20代後半、出身地：カブール、学歴：学士号、滞在資格：永住権、滞在期間：4年

アフガニスタンでは安定し社会的にも信頼される職に就いており幸せだった。治安の悪化、特に自分がいた組織への攻撃が移住の理由である。移住前は、渡航経験のある友人やメディアが伝えるカナダの良好なイメージが、そのまま自分の当初のカナダへの印象であった。その通り、カナダは移民・「難民」を歓迎してくれる国であった。ただ、政府やたくさんの支援団体が様々な手を差し伸べてはくれるが、生活水準と物価の高さは頭が痛い。それでもあらゆる機会は差別なく開かれており、明るい未来があると思っている。ただ、アフガニスタンへ残る家族やアフガニスタンでの生活を思い出すと寂しい気持ちになる。

④年齢：30代後半、出身地：アフガニスタン東部、学歴：学士号（農業）、滞在資格：protected person、滞在期間：2年

アフガニスタンでは国際NGOの上級マネジメントレベルの職にあったが、治安の悪化で恐怖を感じ移住した。現在は移住者の中では珍しく自分の専門分野の職に就いており、とても幸運であると感じている。専門性によってそれに応じた職に就きやすい場合とそうでない場合があるようだ。医療や工学系はたとえ学位があっても、カナダで働くのに必要とされる資格を取得する必要がある。アフガニスタンに残した家族の移住の手続きが予想以上の時間がかかっており心配である。それでもヨーロッパ諸国よりはましであると聞いている。カナダへ来て「良い」と感じたことはたくさんあるが、どこから来た人間であろうと敬意をもって接してくれること、電気が問題なく来ること、教育レベルの高さ、気候の良さなどがある。

⑤年齢：30代後半、出身地：アフガニスタン東部、学歴：学士号（農業）、滞在資格：protected person、滞在期間：2年

アフガニスタンでは政府機関と国際機関で勤務していた。米国での会議が終わった後、そのまま車でカナダへ辿り着いた。逃れた理由は、治安の悪化する中で生活に耐えきれなくなったからである。自分が働いていた街ヘタリバーンが攻撃をかけ、数日だけだが占拠した。その状況がどれほど大変だったことか。現在、塗装会社の助手をしているが、決して望んだ仕事では無い。カナダでは人生を「ゼロ」から始めねばならない。今、成人向けの学校 (adult school) へ通っている。この歳にしては簡単なことではないが、自分にとって重要なことである。カナダでは住居や食料を政府などが支援してくれありがたいが、アフガニスタンに残した家族含め5人家族の自分にとって、住居と食料確保は深刻な問題である。家族の移住の手続きには、とても時間がかかっている。しかし、自らが決めた移住なので、この環境を受け入れなければならない。子供たちの明るい将来がカナダで開かれることが願いである。

⑥年齢：30代前半、出身地：カブール、滞在資格：protected person、学歴：学士号（法学）、滞在期間：1年

アフガニスタンでは選挙監視関連の業務に10年間従事した。家族（妻子）はアフガニスタンに残したままである。現地の治安の悪化から恐怖を感じ、また自分と子供へ最高の教育機会を得るために移住を決意した。カナダでの生活へは当初楽観的であったが、現実には厳しい。経済的な面そして職探しの面で、かなりの精神的な重圧を感じている。ここでは普通の暮らしを送るために懸命に働かねばならぬ。また文化と言語（英語に加え地域によってはフランス語）の違いも乗り越えるべき壁である。カナダでの暮らしは良いところも悪いところもあるが、明るい未来が家族にくることを願っている。

⑦年齢：30代前半、出身地：アフガニスタン東部、学歴：1年滞在、法学士、法学修士（米国）、滞在資格：protected person

治安の悪化と将来への不安から移住した。当初の期待と比べカナダでの生活は大変である。自分は移民（原文では refugee）という地位の厳しさを十分に理解していなかったため (underestimated)、コロナ禍も加わり新しい環境への順応へ非常に苦労した。特にカナダにおける人脈作りと職探しは大変である。カナダの法律事務所で調査員として勤務している。コロナ禍が収束した後に状況が好転することを願っている。

⑧年齢：40代前半、出身地：カブール、学歴：修士号（保健分野）、滞在資格：永住権、滞在期間：1年

アフガニスタンでは保健省で勤務し、誰よりも懸命に深夜までも働き危険を伴う業務にもついていた。そのこともあり、個人的な脅迫もあり移住せざるを得なかった。移住前のカナダへの印

象は、様々な情報を見聞きした中で「夢の国」（dreaming land of mine）であった。しかし到着後すぐに予測しなかった現実に直面した。具体例として① 住居：家を借りる際、家主はクレジット記録や他の書類を要求する、② 運転免許：州によって法規則は異なり、免許取得の手続きと試験が煩雑、③ 文化面でのギャップ：飲酒など長くカナダに住むアフガン人はカナダの文化、風習に染まっているが、アフガンにはアフガンの価値観があるとする。④ 職業：自分の専門分野である保健関係の職へ就くにはいくつも試験を受ける必要がある。もちろんその必要性は理解するが、これまでの経験も考慮されてしかるべきである。

### 第3章 調査結果の分析と考察

#### (1) カナダへの移住を決めた背景・理由

アフガニスタンを離れた理由としては、治安状況の悪化、より豊かな生活を求めるという経済的動機、自身あるいは子どものためにより良い教育機会を求めたことが挙げられている。いずれにしても将来に対する不安が国外への移住を選択した理由と言える。

中でも、外国の組織（大使館や援助機関、民間企業、NGO、大学）、国連などの国際機関、そしてアフガニスタン政府関連の組織に勤務した経歴を理由に、自身あるいは家族までもが、その主体がタリバーンなのか否かは俄に判断はできないが直接的な脅迫を受け恐怖を感じたことを移住の理由に挙げる回答者が多かった。2020年8月のタリバーンの政権掌握後、前政権あるいは海外の組織などと関係がある人々がタリバーンによる迫害や脅迫を恐れ国外への脱出を試みたが、そのような傾向は数年前からあったとも言える<sup>20)</sup>。

ところで、今回の回答者は大学卒以上の学歴を有する、アフガニスタンにおいては高学歴かつ専門性を有する人材である。ある程度の専門性をもつ彼らのような人材の受け入れ先としては、今回対象者が勤務していた政府機関や前述のような外国の組織がその安定性、給与面などで選ばれる。そしてそれらは期限付きの契約ベースでの雇用が多いという事情から、可能であるならばより待遇が良いあるいはステータスが高いと思われる組織へ転職し、それらの機関を渡り歩くことが通常である。

そして、高い学歴と専門性があったからこそ、今回の回答者たちは自国にとって有用な人材を選択的に受け入れて来たカナダへの入国が可能であったという側面も指摘できる。しかし逆にそのような経歴を有することが、カナダで生活する上でもっとも大きな問題となっている雇用のミスマッチの原因となっている。その点は(3)で述べる。

#### (2) カナダでの生活について

カナダを移住先とした理由でもあると思われるが、事前のカナダへの印象は良好であり、そ

これは友人からの情報あるいはメディア（SNS 含む）の影響があったとされる。「夢の国」というような回答もある（2019-2、2020-8）。移住後のカナダ社会の印象も、多様性を重視し、政府や民間の団体の支援があり、外から来た人々（移民・「難民」）を歓迎し敬意をもって接する点が高く評価されている。中には自身が経験したわけではない伝聞情報に基づいて、ヨーロッパ諸国より条件は良いと考えている回答もある（2019-5、2020-4）

しかし、当然とも言えるが移住後は現実の厳しさにも直面している<sup>21)</sup>。職探しの点は次の項で述べるが、その他には経済的支援を受けながらも大都市部に住むゆえの物価、家賃などの生活費の高さへの対応、特に家族連れの場合の家探しの困難さ、運転免許取得方法や交通ルールへの不慣れ、英語あるいはカナダでは東部ではフランス語が必要となるという点など、言語も慣習も異なる地で生活をはじめ、あるいは家族の世話をすることの困難さがあげられている。

ただ、治安の良さという点では一様にカナダでの生活を前向きに捉えている。もちろんそれはアフガニスタンで日々経験した直接的な自らのへの恐怖、あるいは間接的に感じられた治安・安全への不安と比較してのことであろうが、カナダにおいて自らが置かれた境遇あるいは期待と異なる現実への不満は、その一点をもって折り合いがつけられていると考えられる。

### (3) 労働市場への参入－ミスマッチへの不満と諦め

カナダ移住後に長期・短期を問わずこれまでに就いた職業を見ると、一部の回答者を除き（2020-4、2020-7）、倉庫整理、ビルのメンテナンス、皿洗い、駐車場警備、塗装工助手といった高度な専門性が求められることは無いと思われる、いわゆる非熟練（unskilled）の職種に就いている。インタビュー結果にもある通り、もちろんこれらは移住者たちが真に望んだ職業ではなく、多くが自分の学歴・職歴に相応な希望する職種・地位の職が得られないことへの不満、いわゆるミスマッチがあるとの回答が目立つ。加えて、カナダに滞在・居住するための永住権、市民権などの安定的なステータスが、専門性を活かせる職に就くためには必要との回答がある。

「生き残るための仕事」（回答者 2019-5）との表現が回答の中に見られるように、自分自身とカナダあるいはアフガニスタンに残した家族の生活のために、プライドを傷つけられながらも、そしてより自分の希望に合う職種への転職も難しいという中で受け入れざるをえない現実であろう。

ただ、移民・「難民」といった海外からやって来た人々にとって、カナダに限らず各国の労働市場は決して等しく開かれたものではない。日本の労働市場が身近な例としてあるが、特に専門性を求められる仕事には、それぞれの政府や公的機関が定めた学歴や一定の経験、そして試験などによる資格認定が求められることが普通である。そのような傾向は他の移民受け入れ

国でも見られ、高い学歴を有するにもかかわらず低技能および中技能の職に就いている過剰学歴（over-qualification）の割合は、OECD 全域平均や EU 全域平均でも、高い学歴をもつ外国生まれの労働者のうち3分の1以上が該当するとされる<sup>22)</sup>。

他方、移民の統合度を各国別に点数化した Migrant Policy Index 2020(MIPEX) によれば、「労働市場の移動性」(labor market mobility) においてカナダは76点と北欧諸国やドイツ(81点)に次ぐ高い評価を与えられている<sup>23)</sup>。

カナダの移民受け入れ方針として、労働力不足に直面するその経済へ寄与する人材を選択的に入国させているという理由から、一定の水準の学歴、職歴、技能を有する移民にとっては、カナダは他国と比べて比較的専門性を有する職を得やすいかもしれない。ただ、それは全国を平均しての話であり、個別の状況を見れば今回の回答者のような状況にある海外から来た人々の数は、決して少なくないとも考えられる。

#### (4) アフガニスタン人であることのへの意識

年齢や滞在年数これまでの経験も影響していると推測するが、回答者によってはカナダ(西欧)的な生活様式・価値観への違和感をもっている(回答者2020-8)。それはカナダへの批判ではなく、「同じ」アフガニスタン人がそのような環境に順応(あるいは染まっている)していることへの批判である。

カナダ東部のノバスコシア州ハリファックスでアフガニスタン移民を調査した結果によれば、彼ら彼女たちはカナダで受ける様々な恩恵やカナダへ来る機会を与えてくれた国際的な枠組みへ感謝しつつも、完全にカナダ的な生活様式に順応すること、つまりは「アフガニスタン人らしさ」(Afghan-ness)を手放すことは考えていないとしている<sup>24)</sup>。

多文化主義を謳い外部からも移民・「難民」が目指す国とされるカナダであるが、近年は「統合重視の多文化主義」と呼ばれる「カナダ的価値」の共有が重視されてきているとされる<sup>25)</sup>。今回の回答者とその家族は、カナダでの滞在期間が長期化していくに従い、今後、家族・親族間でアフガニスタンのものを維持するのか、あるいはカナダへ順応していくかという点で葛藤が出てくるのではないだろうか。

#### おわりに

アフガニスタンでの生活に恐怖を感じ、将来への希望を失った人々にとって、カナダへ辿り着きそこで新しい生活を始められたことは、ヨーロッパへ向かう途中に様々な妨害、迫害や退去処分を受けた人たちと比べて幸運であつと言える。しかし、希望の国として捉えられがちなカナダであるが、当然のようにその土地では外国から来た人々の前には事前の期待とは異なる

現実が立ちはだかり、皆が等しく希望が叶う場所ではないことも確かである。

2021年8月のタリバーンの復権は、過去の恐怖の記憶から多くの人々が国外脱出するため空港へ殺到する混乱の始まりでもあった。そして、米国、カナダ、日本などの国々は、自国民だけでなく「前」政権下で自国の活動に関わったアフガニスタン人とその家族を救出すべく待避作戦を実施した<sup>26)</sup>。

それらの中には、今回調査の対象者となったようにアフガニスタンにおいて社会階層は低くなく、教育水準も高く、豊富な職歴あるいは専門性を有する人たちも含まれる。ただ、そのような人材こそ、どのような政治・経済体制、社会になったとしてもアフガニスタンの安定と発展に必要な人材であることも確かである。

国外へ逃れた人々がアフガニスタンへ帰還するのか、あるいは長期的に移住先で暮らしていくのかは、おそらく本人たちにも確かなことは言えないであろう。ただ、移民にとって望ましい環境と考えられるカナダでも多くの困難に直面するその姿は、アフガニスタンから国外へ逃れた人々の今後の苦難を予測させ、そして「普通」に暮らせることが可能となるアフガニスタンの安定こそ一連の問題の解決策であることを改めて示している。

\*本稿は JSPS 科研費 19K20535 による研究成果の一部である。

## 注

- 1) さまざまな理由から生まれた国、土地から移動した人々については、与えられた滞在のステータスや状態によって様々な呼称があるが、本稿では移民あるいは「難民」と記す。
- 2) カナダ政府ホームページ ([https://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/about-a\\_propos/multiculturalism-multiculturalisme.aspx?lang=jpn](https://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/about-a_propos/multiculturalism-multiculturalisme.aspx?lang=jpn)) 2022年3月3日閲覧。
- 3) Gogia and Slade (2011: 33)
- 4) カナダ統計局によれば、2021年第四半期時点の人口は約3,840万人である。<https://www150.statcan.gc.ca/t1/tbl1/en/tv.action?pid=1710000901> 2022年3月3日閲覧。
- 5) 飯坂、竹中編 (2021, 9章)。2015年10月、トルドー政権においてアフガニスタンからの難民であるマリアム・モンセフが入閣したと話題になった。ただその後には彼女の両親はアフガニスタン人であるが、彼女が生まれたのはイラン生まれであると報道された。<https://www.afpbb.com/articles/-/3101909> 2022年3月10日閲覧。
- 6) Gogia and Slade (前提書: 51)。
- 7) [https://web.econ.keio.ac.jp/staff/nobu/iraq/casualty\\_A.htm](https://web.econ.keio.ac.jp/staff/nobu/iraq/casualty_A.htm) 2022年3月3日閲覧。
- 8) Massie (2019)、Middlemiss (2016) など。
- 9) Middlemiss (前掲書: 52-53) によれば、当初は比較的安定した西部のチャグチャランあるいはヘラートへの派遣が検討されたが、当時の政権内で「派手に行こう」(“go big!”) との意見があり敢えてカンダハールが選択されたとされる。
- 10) Boucher and Nossal (2017: Ch.2)

- 11) UNHCR ホームページ (<https://www.unhcr.org/refugee-statistics-uat/>) 2022年3月7日閲覧。
- 12) 2020年12月末時点で、パキスタンに約145万人、イランに約79万人のアフガニスタン難民・庇護希求者がいたとされる。UNHCR ホームページ (<https://data2.unhcr.org/en/documents/details/90588>) 2022年2月16日閲覧。
- 13) タリバーンが地方部で勢力を拡大していた2021年7月、カナダ政府はカナダ軍とともに働いた通訳、料理人、運転手、清掃人、建設関係者、警備関係者、カナダ大使館で雇用されたスタッフとその家族に対しカナダ移住のための特別プログラムを開始し、ほかの人道プログラムも併せて40,000人を受け入れるとしている。<https://www.canada.ca/en/immigration-refugees-citizenship/services/refugees/afghanistan/key-figures.html> 2022年3月7日閲覧。
- 14) 2021年8月、タリバーンが事実上の政権を掌握して以来、かつて政府機関や外国の組織での勤務経験があるスタッフは脅迫を受けるあるいはその可能性があることを恐れている。そのような傾向は本調査を実施した2019年、2020年にも見られ、氏名を含む個人が特定される情報を明かさないと条件で聞き取りを実施した。また、調査時に匿名にすることを念入りに再確認する回答者もいたため、本稿においても可能な限り各人の出身地、学歴、職歴、現在の居住地などの情報の詳細は記さない。
- 15) 調査員が男性であったことで、回答者も全員男性となった。
- 16) ヨーロッパに関する研究としては Dimitriadi (2018) など。
- 17) 年齢、滞在ステータス、滞在期間などは全て聞き取り時の情報である。
- 18) 1カナダドル≒90円とすればおよそ45万円。
- 19) 人種、宗教、国籍、所属組織、政治的意見を理由に母国で迫害を受ける恐れのある者は、**protected persons** と指定されカナダ政府からの支援を受けることができる。<https://www.canada.ca/en/services/benefits/education/student-aid/protected-persons.html> 2022年3月7日閲覧。
- 20) 筆者が日本の援助機関職員としてアフガニスタンに滞在・渡航していた2010年前後にも、現地のスタッフから「タリバーンがやって来た場合、日本政府は我々を日本へ受け入れてくれるのか?」といった質問がされた。当時はまだ、それが現実のものとなる可能性は低いと思われていたが、そのような漠然とした不安はアフガニスタンの人々に存在していた。
- 21) 「ホームレスを見た時に現実に気づいた」(回答者2019-2)との回答は印象的である。
- 22) 経済協力開発機構(OECD)/欧州連合(EU)(2020:106)。
- 23) 日本は59点となっている。<https://www.mipex.eu/labour-market-mobility> (2022年3月7日閲覧)
- 24) Nourpamah (2014:64)
- 25) 飯笹 (2021:64)
- 26) 日本でも大使館・援助機関関係者、NGOスタッフ、日本への留学経験者といった日本政府・民間の事業に協力した、あるいは関わりのある人々を救うべしとの声が高まり、日本政府は8月下旬にカブールへ自衛隊機さらに政府専用機を派遣した。またNGOは独自の方法で脱出を希望するアフガニスタン人を国外へ退避させる活動を開始した。

## 参考文献

### 日本語文献

- 飯笹佐代子(2021)「多文化主義の今」日本カナダ学会編、飯野正子、竹中豊総監修『現代カナダを知るための60章 第2版』8章、明石書店
- 伊豫谷登士翁(2021)『グローバルゼーション—移動から現代を読みとく』筑摩書房

- 大岡栄美 (2017) 「今日の移民政策—多様性を強みに変えるカナダ的挑戦」、細川道久編著『カナダの歴史を知るための50章』41章、明石書店
- (2021) 「移民政策と社会統合」、日本カナダ学会編、飯野正子、竹中豊総監修『現代カナダを知るための60章 第2版』8章、明石書店
- 加藤普章 (2018) 『カナダの多文化主義と移民統合』東京大学出版会
- 経済協力開発機構 (OECD) / 欧州連合 (EU) 編著 (2020) 『図表でみる移民統合 OECD/EU インディケーター (2018年版)』明石書店
- 古地順一郎 (2017) 「「ポイント制」の導入と難民受け入れ政策」、細川道久編著『カナダの歴史を知るための50章』40章、明石書店
- コーエン、ロビン (2020) 『移民の世界史』小巻靖子訳、東京書籍 (Cohen, Robin (2019) *Migration The Movement of Humankind from Prehistory to the Present*, Andre Deutsch limited.)
- ノールズ、ヴァレリー (2014) 『カナダ移民史—多民族社会の形成』細川道久訳、明石書店 (Knowls, Valerie (2007) *Strangers at Our Gates*, Dundurn Press Limited)

英語文献

- Boucher, Jean-Christophe and Nossal, Kim Richard (2017) *The Politics of War Canada's Afghanistan Mission 2001-2014*, Vancouver, UBC Press.
- Dimitriadi, Angelike (2018) *Irregular Afghan Migration to Europe At the Margins, Looking In*, Palgrave Macmillan.
- Gogia, Nupur and Slade, Bonnie (2011) *About Canada Immigration*, Winnipeg, Fernwood Publishing.
- Majidi, Nassim (2020) "Assuming Reintegration, Expecting Dislocation – Returns from Europe to Afghanistan," *Intranational Migration*, Vol.59, No.2, pp.186-201.
- Massie, Justin (2019) "Why Canada Goes to War: Explaining Combat Participation in US-led Coalitions," *Canadian Journal of Political Science*, Vol.52, pp.575-594.
- Middlemiss, Danford (2016) "Afghanistan and After: The NATO Factor in Canadian Defense Decision Making," *Beyond Afghanistan An International Security Agenda for Canada*, Ferguson, James and Furtado, Francis eds., Ch.3, Vancouver, UBC Press.
- Nourpamah, Shiva (2014) "A Study of the Experiences of Integration and Settlement of Afghan Government-Assisted Refugees in Halifax, Canada," *Refuge*, Vol.30, No.1, pp.57-66.
- Triadafilopoulos, Triadafilos (2012) *Becoming Multicultural Immigration and the Politics of Membership in Canada and Germany*, Vancouver, UBS Press.

(嶋田 晴行, 立命館大学国際関係学部教授)

## Current Situation and Challenges of Afghan Immigrants and Refugees in Canada – a brief analysis of interview results from Canada

This article is based on interviews conducted in eastern and western Canada in 2019 and 2020, examining why Afghans moved to Canada and what their lives are like there. Canada is assumed to be an ideal destination for Afghans as well as other immigrants because the government has officially declared a policy of multiculturalism and immigrants expect to be treated equally. However, as this article shows, the reality is not what Afghan immigrants had envisioned. The job market is not open to everyone, and skilled and qualified immigrants face high hurdles in obtaining jobs and positions commensurate with their careers. While Afghan immigrants experience these challenging conditions, living in a safe environment is perhaps the most valued reason for living in Canada. In short, security is the most important factor for Afghans. After the Taliban came to power on August 15, 2021, not a few people fled Afghanistan because of concerns about relations with Western countries. This study was not completed as scheduled, due to the Covid-19 pandemic. However, it does provide useful lessons concerning the future lives of Afghans as migrants.

(SHIMADA, Haruyuki, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)